
東方地霊殿異説

sakeuskdhufufgj

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方地霊殿異説

【Nコード】

N5015Q

【作者名】

sakeuskdhufufgj

【あらすじ】

東方地霊殿で明かされた、黒幕にスポットをあてた物語です。処女作なのでいろいろ読みづらいと思いますが、感想でガンガン突っ込んでくれると喜びます。

1 蠢動

「さとり様」

傍らに現れた人魂の声を聞いたさとりは、読んでいる書物から顔を上げずに「どうしましたか」と問いかける。

「お客様がいらしているようです。八雲紫と言えば分かる、とおっしゃっていましたか」

「分かりました。すぐにここへお迎えなさい。」

「かしこまりました。」

人魂はすぐに、玄関で待たせている勇儀のもとへと去っていった。

さとりは書物を脇の横棚に置き、小さく息をついた。

「あの八雲さんがこの館を訪れるなんて、なにやら一波乱ありそうですね。」

地霊殿。

地底に存在する最大の建造物であり、また地底世界最凶の妖怪姉妹が住む館でもある。

そもそもこの館の主、古明地姉妹は、人の心を読む事ができるとい^{サード・アイ}う第三の目を持ち、それゆえに地上の妖怪たちから忌み嫌われ追放された歴史をもつ。その際追放命令を下したのが、「境界を操る程度の能力」をもつ史上最強の妖怪、八雲紫である。

紫は自身の能力で現世から古城を地底へと移動させ、古明地姉妹に新たな住居として与えたのだが、当然そのようなことで姉妹の怒りが収まるはずも無く、しかし彼女たちの力をもってしても紫には敵わないので、しぶしぶ現状を受け入れている。

その後姉のさとりの方は、さまざま妖怪をペットとして飼うようになり、地底での生活にも慣れてきたようであったが、妹のこいしは、自身の能力を恨み第三の目を閉じてしまった。

そのようなことがあって、紫とさとりとの間には深い因縁があり、

紫も姉妹を地底に追放した後は極力彼女たちとの接触を避けていた。しかし今回、紫が直接この地霊殿を訪れたということは、紫の側にも何かしらの深刻な事情があるのだろう。

そんな彼女の思考は、部屋をノックする音で中断された。彼女は「どうぞ」と言いながら、お茶の準備をはじめた。

欠々に見る紫の姿は、以前と比べても大きな違いは無いように思われた。

腰の辺りまで伸ばした豊かな金髪、妖艶な色気を漂わせる紫色のドレス、品の良さを感じさせる桜色の日傘。

「お久しぶりですね、古明地さん」と口を開けば、豊かな教養を感じさせる落ち着いた、深みのある声がこぼれる。

「突然お邪魔して、申し訳ありません。しかし、急を要する話だったものですから。」

「いいえ、どうかお気になさらず」

口調こそ丁寧であるものの、紫はさとりがあまり歓迎しているようではないと察したらしく、「では、突然で悪いのですが」といきなり本題を切り出した。

「何でしょうか。私が答えられる範囲の質問であれば、何でも答えて差し上げますが」

「ええ。貴方、地獄烏をペットとして飼っていらっしやるのでしょうか？」

確かにさとりは、灼熱地獄で暴れていた空（あいつ）という名前の地獄烏をペットとして飼いならしていた。空は「核融合を操る程度の能力」をもっていたが、それを買われて現在では灼熱地獄の管理のほかに地霊殿の電力供給も担当している。

「はい、空という名の烏を一羽飼っています。空に、何かあったのでしょうか？」

「私の使い魔の報告してきたところによると、最近灼熱地獄で異常な気温上昇が見られているとのこと。どうやらここ一週間ほど

の間に200度ほど上昇しているらしく、私も地上の間欠泉を確認してきたのですが、確かに水温が上昇していました。そこで灼熱地獄の管理人を調べさせたところ、貴方の飼っている地獄烏さんと判明したので、主人である貴方のところにお伺いした次第です。古明地さん、最近その空さんに、何か変わったところはありますか？

「変わったところも何も、空は普段灼熱地獄で生活しているので、私が直接管理しているわけではありません。ですので普段は、空と仲の良い地獄猫、燐にあれの様子を見てもらっているのです。もし何かあれば、燐がすぐに伝えてくるでしょうから、おそらくまた空がちよつと暴走してしまったという、それだけのことでしょう。」
「どうやら紫は、さとりが地上侵略を目論んで空に灼熱地獄で暴れるよう命令したと思っっているらしい。ここ1000年の間、地上に行くことなどまったく考えもしていなかったさとりにとっては、紫の心の中を読むことは不快であった。」

「とにかく、燐から何か報告があればすぐに伝えますので、今日のところはお引取りいただけられないでしょうか」

自分の発言が失礼だと自覚はしていたが、さとりはこれ以上この妖怪と相對しているのはごめんだった。

「そうですね。お時間取らせて申し訳ありませんでした。では、報告の件よろしくお願ひしますね。」

来る時と違つて、帰りは「すきま」を開いて直接帰るつもりらしい。わざわざ玄関から来訪したのは、彼女なりの礼節というものだろうか。

さとりはその礼節に少しでもこたえようと、今まさにすきまに入ろうとしている紫に声をかけた。

「私は貴方が思っているようなことは全く計画していませんよ。確かに私は貴方のことを恨んでいます、私にも私なりの義理というものがありますから。」

紫は何も言わなかったが、どうやら少しは信用してくれたらしい。

さとりはほつと息をついて、横棚の書物を再び手に取った。

「しかし、空に何かあったというのは本当のようですが、燐は一体何をしているのでしょうか？」

さとりは、ここ一月ほど見かけない地獄猫のことを考えて、小さなため息をついた。

1 蠢動（後書き）

2 / 2 書き直しました。

勇儀はこれから登場予定が無いキャラだったのでさとり視点に変更。

あと少しは読みやすい文章を心がけたつもりです。

感想くれると喜びのあまり爆発します。

博麗霊夢は、博麗神社の巫女である。

しかし残念なことに神社の周りは妖怪の棲む森で囲まれているため、参拝客、つまりお賽銭はほとんど期待できない。

ではなぜ彼女の生活が成り立っているかといえば、彼女は妖怪たちから慕われているからであった。

博麗の巫女は代々、現世と幻想郷の境界「博麗大結界」を管理しており、現世から忘れ去られた妖怪たちが消滅してしまうのを防いでいる。また霊夢はお節焼きなので、妖怪同士の争いの仲裁や幻想郷の異変の解決など忙しく立ち回っており、歴代の博麗の巫女の中でも、最も妖怪たちに人気のある巫女である。

このため霊夢は、ほとんどお賽銭が入ってこなくても、異変解決の謝礼や近くを通る妖怪たちからのお裾分けでなんとか食いつなぐことができているのだ。

そして今日も霊夢は、平和な日常を希求しながらお茶を啜るのであった……

博麗霊夢編 これにて

「終了とはならないわ。あと霊夢、私にもお茶をくださるかしら？」

……終了とはならなかった。

なんとも迷惑なすきま妖怪である。

「……それで、今日は何の用？紫」

「ええ、ちよつと異変の解決をお願いしたくて」

「貴方が直接お願いに来るなんて珍しい。どこで何があったのかしら？」

「霊夢、幻想郷に『地底世界』があるのは知っているわね」

「ええ、阿求の幻想郷縁起にも書いてあるわ。忌み嫌われた妖怪と怨霊の棲みかだったわよね」

「実はその地底世界にある灼熱地獄で、空という地獄烏が暴走しはじめたようなのよ」

「灼熱地獄で暴走とは穏やかじゃないわねえ。でもその程度の異変なら、鬼が解決してくれるんじゃないかしら？」

「ところがその地獄烏、どうやら自分の能力以上の力を持っているらしくてね。私にも詳しいことは分からないのだけれど、なんでも鬼では近づけないほどの熱が灼熱地獄から発生しているらしいわ。

このままだと間欠泉にも影響が発生しかねないから、貴方にこの件の解決をお願いしに来た、ってわけ」

「わかったわ。貴方のことだから、報酬には期待させてもらおうよ」
それだけ言つと、霊夢はお節介焼きの血が騒いだのか、さっそく地底に行くための準備をし始めた。

「こちらこそ貴方の働きに期待してるわよ。ではまた地上で会いましょう」

それだけ言つと紫はすきまに戻つていった。

すきまの中で、紫は今回の異変について考えていた。

結局のところ、今回の異変はただの地獄烏の討伐だ。多少強くなっているとはいえ、博麗の巫女の手にかかればそのような異変はすぐに解決されるだろう。

しかし、誰が地獄烏に力を与えたのだろうか？ さとりの話によれば、空は彼女のペットで、頭はそんなに良くないという。また灼熱地獄に墮ちるような罪人の魂はあまりに汚いため、さとりは空に彼らとの接触を禁じている。それが破られるようなことがあれば、必ず燐が報告に来るはずだというのだ。

確かに間欠泉から地底に入るとは可能だが、真下が灼熱地獄であるためそんなところを通つてわざわざ地底に行こうとする妖怪はい

ない。しかし、そうなる唯一の地底への入り口である洞窟から何者かが侵入したとしか考えようがないが、その洞窟は紫の使い魔が常時監視している。よほど強力な妖怪でなければ監視の目をかいくぐって侵入することは出来ないはずだが、紫の記憶の中にそれほど力を持ち、なおかつわざわざ地底に行こうとするような妖怪はいなかった。

ならば地底の妖怪かとも考えたが、勇儀は主人であるさとの許可を得ずに勝手にさとのペットに何かするとは考え辛し、さとり自身は今回の件との関与を否定している。他の地底の妖怪では、そもそも地獄烏に与える「力」を保持していることができないだろう。「まあ、そんなことはその地獄烏とやらを捕まえてから吐かせばいいだけのことですね」

紫は思考を中断し、すきまを開けて彼女の優秀な使い魔、藍を呼び出した。

「藍、天狗の里へ行って、地上の妖怪に不審な動きがないかどうか報告させなさい」

「かしこまりました」

藍は短く言うと、使い魔（藍は紫の使い魔であると同時に、自身も使い魔を所有している）の橙を伴ってどこかへ去っていった。

藍が去ると、再び「誰が」という問いが紫の頭の中で渦巻き始めた。

「それにしても、一体誰が・・・」

紫には、この異変が単なる地獄烏の暴走では終わらないような気がしてならなかった。

そしてまもなく、紫の悪い予感現実のものとなるのだが、まだ誰もそのようなことは知る由も無い。

霊夢は、地底へとつながる洞窟の入り口に立っていた。

洞窟の中に吹き込んでいく生暖かい風が、霊夢の背中を撫でるので、不気味なことこの上ない。

「紫から話は聞かされていたけど、実際に見るとまた違うわね。」

実際にこれから降りる世界のことを考えて、霊夢は少し物怖じしたが、結局彼女を動かしたのは紫が約束してくれた報酬への欲だった。

「まあ、地獄とはいえ管理してるのはただの烏だっていうし、たいしたことないでしょ。」

霊夢は自分に言い聞かせるようにして、洞窟の中へと入っていった。

ところで、ここ最近の話だが、幻想郷に新たな住人が外の世界から移住してきた。

彼らは守矢神社の神々であり、現世で信仰が集まらなくなってきたため、幻想郷の存在を知った神社の巫女であり、現人神である東風谷早苗が、同じく神である八坂神奈子と洩矢諏訪子の協力を得て、「奇跡」を起こし、この世界へ移住してきたという。

当初は妖怪の山全体に強引に布教を行ったため、山の神々や、天狗、河童といった山に住む諸勢力と敵対し、霊夢に諫められたのだが、妖怪たちとの関係を修復した後はフランクな神様として徐々に信仰を集めているらしい。特に河童の里とは、現世の情報を与えるなどかなり活発に交流しているようであった。

そしてこの日、東風谷早苗は、人間の里へ赴いて守矢の教えを伝え、分社を建て祀ってもらったための交渉を行っていた。

「何も難しいことはありません。ただ分社を建てて、毎日拝んでくださるだけでよいのです。私たちの神社には三柱も神がおりますから、拝めばさまざまなお利益があることを保証します。」

「いや、でも神社といえはすでに博麗神社があるからねえ。博麗の

巫女たちの活躍によって今日の俺たちの生活は成り立っているから、新しい神社を建てるといふのはどうもそちらさんに悪い気がしてねえ」

「そんなことはありません。『八百万の神』というように、この世界には数多くの神様がおわしますが、神様は自分以外のものを信仰しているからといって貴方がたを見捨てるようなことはありません。寺院ならいざしらず、多くの神を祀るといふことは貴方たちにとつて大きなメリットになります」

「へえ、そんなものなのかい。まあとにかく、こちらは今田植えの時期だから忙しいんだ。少し仕事が落ち着いてから、また来てくれないか」

「分かりました。ではくれぐれも分社の件、よろしくお願いしますね。」

早苗はすこし残念そうな調子で話を切り上げ、時間を取らせたことへのお詫びとお礼を礼儀正しく言うてから人間の里を離れ、神社へ戻った。

神社では、相変わらず何をしているのか分からない、いや何もしていない様子の神奈子と諏訪子が、早苗の帰りを待ち望んでいた。神社についた早苗に、すぐに神奈子と諏訪子が質問を浴びせる。

「で、どうだったんだい、分社建立の交渉の首尾は」
「もう建ててくれることになったー?」

早苗は力なく首を振るだけであつたが、その回答は神奈子と諏訪子にとつては十分すぎるほどの衝撃であつた。

「なんで?この人たちは信心深いって、あの紫とかいう妖怪も言つてたじゃん」

「私も、彼らがすぐに快く建ててくれるものと思つていたのですが、どうやら彼らは博麗の神社のほうに遠慮しているようだ」

「また博麗が出てくるのか。妖怪の山での我らの所業を止めたのも博麗とくれば、分社建立が成らない原因も博麗か」

「博麗の巫女は代々『博麗大結界』でこの幻想郷を守っていますから、妖怪や人間たちに広く慕われています。我ら新参の力ではどうにもなりません」

「そもそもその結界とやらの所為で、我らはこの里にいる人間以外に信仰を伝えることができぬ。妖怪も信心があるとはいうものの、やはり人間に比べればその力も頼みには出来ぬし」

早苗と神奈子は、この閉塞した状況をどうするか真剣に討議していた。ここでも信仰が得られないとなれば、自分たちの存在が脅かされかねない。

そのとき、話を聞いているのか聞いていなかったのか、突然寝転んでいた諏訪子が飛び起きて言った。

「そうだ！博麗の巫女を倒して、博麗大結界を壊しちゃおうよ。そうすれば現世の信仰も得られるし、厄介な巫女もいなくなつて一石二鳥だね」

「なるほど、あれを倒してしまうというのですか。しかし我々の陣営はあまりに貧弱ではありませんか？」

「その点については問題ないだろう。かつて幻想郷を席卷した鬼、蟲、天狗の三種族は、現在では鬼は絶滅の危機に瀕しており、蟲は時代と共に弱体化し、天狗はまだまだ隆盛を誇っているがここから近いので、電撃作戦で壊滅させればよい。」

「そうそう。しかもちようどいいことに、いま空ちゃんに神の力をちよつとだけあげてるんだよね！。「地上を征服できるよ！」とか焚きつければ異変を起こしてくれるだけの力はまだ持つてるから、ここ最近暴れるように指示を出してるんだ。そろそろお人よしのあの巫女が異変解決に向かうんじゃないかな？」

「そうすれば、我らに残る難敵は例のすきま妖怪のみ。いくらあの妖怪が強大といえども、我らがかかればひとたまりもないだろう」

「あとは天狗の里を攻めるための準備だよね！。徒手空拳で挑むのもちよつと面倒だし」

「それに関しては、河童に頼んで新たな兵器を開発してもらったの

で問題ない。やつらの羽根をこれで撃てば、やつらは得意の高速移動を生かすことが出来ない」

諏訪子のひよんな発言から、急に守矢神社再興の話が現実味を帯びてきていることに、早苗は驚きを隠せなかった。何よりも驚いたのは、諏訪子が既に策を練っており、準備を始めていたことである。

そういえば、「諏訪大戦」の折、最先端の技術である鉄輪が全く通用しなかったにもかかわらず、諏訪子と神奈子が長期間にわたって激戦を繰り広げたのは、神奈子が諏訪子謀略に苦しめられたからであるという話を聞いたことがある。

結局諏訪子は戦闘では一度も勝てず、最後には守矢神社を明け渡したのだが、その時にも諏訪子が信者を洗脳していたため、信仰を獲得するために神社の新たな主神奈子が諏訪子を呼び戻し、合祀という形をとったらしい。

普段はぼーっとしているようにみえる彼女たちも、水面下での暗躍に関してはまだまだ若い早苗の理解をはるかに超えていた。

「・・・というわけだが、聞いていたか、早苗？」

「あ、は、はい。では、策戦決行はいつでしょうか」

「とりあえず博麗の巫女の動向を探らなければならぬ。空という餌に釣られ地底に潜ったのが確認されたらすぐに行動を開始する」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5015q/>

東方地霊殿異説

2011年3月1日20時54分発行